

# 男性不妊により不妊治療中の女性の社会心理的状況

キーワード：男性不妊、不妊治療、社会心理

研究者            中嶋文子            京都大学医学部附属病院

## はじめに

不妊治療はカップルの挙児希望を前提に行われ、不妊治療は不妊原因を明らかにするための検査と治療が同時進行でかつ段階的にすすめられるという特徴がある。一般的に、不妊原因は男性女性とも同じように多いとされているにもかかわらず、治療は主に女性に施される傾向がある。先行研究によると、治療が長期化し治療の段階が進むということは、不妊がより深刻であることを意味し、それに伴い女性の悩みや辛さが増強すると指摘している<sup>1) 2)</sup>。そしてこの状況は、不妊治療中の女性の心理的傾向や負担として多く報告されている。

近年では、高度生殖医療（以下 ART とする）の技術的進歩により、重度の男性不妊による不妊症であっても、子どもをもつことが期待できるようになった。男性不妊の場合、不妊治療開始後の早い時期から ART が開始され、治療は長期化する傾向にあり、女性側に不妊の原因がある場合とは経過が異なる傾向にある。男性不妊のため不妊治療を受けている女性の社会心理状況を理解することは、治療を継続する上での看護に有用であると考えらる。

## 研究目的

本研究では、男性不妊により不妊治療を継続している女性の社会心理状況を明らかにすることを目的とする。

## 研究方法

### 1. 研究対象

対象は男性側の不妊原因により不妊治療中の女性 2 名である。

## 2. 方法

研究に当たり、施設長および看護部長、診療課長に対し、文書を用いて研究の趣旨と研究計画の説明を行い、同意を得た。その後、診療科の医師、看護師に調査方法を説明した。

2000 年 12 月に不妊治療のために受診した女性に研究の趣旨と研究計画の説明を行い、面接と面接内容の録音の同意を得られた患者に対して、外来の待ち時間を利用して面接を行った。

年齢、病名、合併症、既往歴、産科歴、不妊治療歴、治療後妊娠歴などの背景は外来カルテより収集し、面接内容と照合した。

## 3. 調査期間、時間、面接内容

- 1) 調査期間 2000 年 12 月
- 2) 面接時間 30～45 分
- 3) 面接内容 不妊治療を継続する状況や、治療に対する思いについて半構成面接を行った

## 4. 分析方法

分析に当たっては、面接によって得られたデータを逐語録にした後、同じ意味をもつ内容を抽出しコード化した。更にサブカテゴリーに集約し抽象度を上げカテゴリーとした。データ解析には、同様の研究手法の経験のある見識者からの指導を受けた。

## 5. 倫理的配慮

研究趣旨と内容を口頭及び文書で説明し、同意を得た。また、いつでも研究への参加を中止できることを伝え、話したくないことは拒否する権利のあること、面接で得られたデータは研究以外の目的には使用しないことと、プライバシーの保護を説明し、承諾を得た。

## 結果

### 1. 研究参加者の背景

研究参加者の 29～32 歳で、結婚後 5～10 年である。2 名とも結婚当初より男性側の不妊が予測されており、不妊治療の開始は結婚直後～1 年である。不妊原因は無精子症と精管狭窄であり、いずれも治療には精巣精子の採取を必要とされている。2 名とも女性側の妊孕性の問題は指摘されていない。治療開始後の顕微授精の回数は 3～7 回である。

### 2. 不妊治療を継続する中での社会心理的状況

調査対象の語りの中から、不妊治療を継続するうえでの社会心理的状況について、7 つの【カテゴリー】、34 の＜サブカテゴリー＞、123 のコードを抽出した。以下カテゴリーを【     】、サブカテゴリーを＜     ＞で示す。

1)【子どもをもつことへの希望】は、5つのサブカテゴリーから構成された。

このサブカテゴリーでは、「子どもは3人ほしいと思っていた」「30歳までに3人産むと決めていた」などのように、女性が自分の人生の中で具体的な挙児に対する計画を持っていることから「挙児の計画がある」、「兄弟の子どもを見るとかわいいと思うし、自分も欲しいと思う」「姉の子どもがなつくとかわいい」など、自分のきょうだいの子どものなど周囲の子どもとの接触が挙児希望に影響する様子より「子どもとの接触によって挙児希望が生まれる」、「(子どもができないなら)若いうちは離婚も考えた」「子どもができないなら実家でも帰って来いと言っていた」のように、解決できない不妊の問題がある場合夫婦のあり方そのものを問う様子より「子どもをもちたいことが夫婦の目的」、「(夫の精子の状態では)もうあきらめなしゃあない」「今の医学ではどうしようもない」のように不妊の厳しい現実を突きつけられたときの状況より「挙児への絶望」、「夫との間に子どもができないなら、二人の生活もいかなと思う」のように、挙児への希望が薄れたことより「子どものいない生活も考える」が抽出された。

2)【不妊治療への思い】は、5つのサブカテゴリーから構成された。

このサブカテゴリーでは、「治療費は病院によってかなり違うが、数十万円かかる」「何度も注射に通わなくてはならない」など、不妊治療に伴う様々な負担感がある様子より「身体的・経済的・時間的負担」、「顕微受精すれば妊娠すると信じていた」「期待していたので、生理が来たときには落ち込んだ」のように、治療の度に期待を持ち、結果失敗に終わったときの落胆を繰り返す様子より「治療に対する期待と落胆」、「(夫の状態を知って)早く治療しようと思った」「(何度も失敗して)自分は子どもに対する情熱はちょっと…という感じになって」のように、治療の経過により治療経過の意欲が変化する状況より「治療継続への意欲」、「自分の卵や子宮は良いと言われている」「他の人みたいに治療そのものの気持ちの辛さは無い」のように、不妊の原因が自分には無いと感じている様子より「自分は悪くないという思い」、「不妊の悩みは一生続かない」「産めば終わるし、産めなくなれば終わる悩み」などのように、不妊であることの悩みが状況の変化によって変わると感じている様子から「不妊の悩み」が抽出された。

3)【男性不妊治療の特徴】は、10のサブカテゴリーから構成された。

このサブカテゴリーでは、「検査技師の夫が自分で検査したら乏精子症だった」「1年子どもができないから病院に行ったら、まず精子の検査をした」など、治療を開始したきっかけの様子より「不妊治療開始のきっかけ」、「治療を始めてすぐに体外受精をした」「民間病院と大学病院で治療した」「半年から1年に1回のペースで顕微授精をやっている」などのように、治療開始からこれまでの治療の様子より「不妊治療の経過」、「不妊治療は夫婦一緒にするものと思っていた」のように、不妊治療に夫婦そろって取り組む姿勢より「不妊治療は夫婦である」、「自分の検査はほとんど無かった」「自分はホルモン検査だけだった」のように、治療の過程での女性側への検査の状況より「女性の検査はほとんど無い」、「精子は1回分しか取れなかった」「今の医学ではどうしようもないと言われた」のように、シビアな男性不妊における治療の難しさの状況より「治療の成績は悪い」、「顕微授精しないといけない」「あとはAIDするしかない」などのように、男性不妊に対する治療の選択肢が限られている状況から

治療の選択肢が乏しい>、「7年後に主人が泌尿器科に行ったら、もっと今ならもっと早いところで調べられるからって薦められて…」最近では1回で（精子を）採る量を増やして、残りは冷凍保存している」など、治療の過程で新たな技術が開発される様子より<新しい治療に対する期待>、「1回の手術で IVF3～4 回分の精子を採る」「精子を採った後は歩けないくらい痛いらしい」のように、精子を採取する際の男性に侵襲的な処置が行われている様子より<精子の採取に侵襲的な処置を要する>、「（夫は）あきらめていたのに希望があるなら手術するって」「採れるかどうか分からないけど、可能性があるならやる」など、男性が妊娠の可能性にかけて厳しい治療に取り組む様子より<希望を持ち困難な治療に挑む>、「夫の手術に合わせて排卵を誘発する」「泌尿器科で採った精子を冷凍して、保存するのは婦人科」のように、泌尿器科で採精が行われ、婦人科で IVF-ET が行われるという治療上の特徴より<診療科間の連携を要する>が抽出された。

4) 【治療を続ける上での夫との関係】は、6つのサブカテゴリーから構成された。

このサブカテゴリーでは、「子どもを作るという目標があるから普段から協力できる」のように、子どもを得ることを夫婦ともに目指していることを実感している状況より<夫婦の共通の目標があるという実感>、「夫婦とも治療には積極的」「夫婦で治療に合わせて休暇を取る」「治療に必要なお金の使い方を決めている」など、治療のために夫婦が協力していると実感している様子より<夫婦が協力しているという実感>、「夫には何でもいえる」「（無精子症と聞いて）二人で泣いた」のように、治療に伴う感情を互いに分かち合っているという様子より<二人で感情を共有しているという実感>、「採精後は歩けないくらい凄く痛いらしい」「夫は何も言わないが、時々自分を責めていると感じる」のように、からく夫に対する気遣い>、「主人はとにかく子ども欲しいから、それで私にも「やれ」って言う」のように、夫から治療を要請されている様子より<夫からの期待>、「（子どもができないのは）夫のせいだという怒りの気持ちがある」「夫のせいだと思っている自分は悪いと思う」などのように、不妊の原因が夫にあることに対する感情より<夫に対する怒りの感情>が抽出された。

5) 【血をつなぐという役割認識】は、2つのサブカテゴリーから構成された。

このサブカテゴリーでは、「自分が実家の跡取り」「家や墓を守らないといけないから跡取りが必要」など、夫婦の家をつなぐ役割を意識している様子より<血をつなぐという役割>、「夫との子供ができなければ養子は要らない」「AID は育児とか将来のこと考えると難しい」のように、夫婦の血をつなぐことを重視する様子より<他人の子はいらない>が抽出された。

6) 【周囲の人間との関係】は、4つのサブカテゴリーから構成された。

このサブカテゴリーでは、「実母は毎回期待して、失敗すると落ち込んでいる」「母は不妊治療で障害児が生まれるのではないかと心配している」のように、不妊治療に対する実父母との関係より<実父母との関係>、「義父母には結婚当初は子どもはまだかと言われた」「夫の乏精子症のことをはなしてあるから何も言わない」のように、不妊や不妊治療に対する義父母との関係より<義父母との関係>、「職場では不妊の人や流産した人の励みにされるので複雑」「知っている人が増えたことを、話をできる人が

増えたと考えるようにしている」など、職場の同僚とのやりとりの影響を受けている様子より<職場の人間との関係>、「占いでみてもらったら、…2年半はできんと言われた」のように、他人からの言葉の影響より<他人との関係>が抽出された。

7)【仕事と不妊治療との関係】は、2つのサブカテゴリーから構成された。

このサブカテゴリーでは、「治療周期に休みを合わせるのが難しい」「交替勤務で基礎体温が測れない」など、治療周期に合わせて仕事を調整する様子より<治療継続と仕事との両立の困難さ>、「仕事中は他の事考えてられないから、仕事が気を紛らわしてくれている」「治療という絶対 IVF なんて、治療を続けるためには仕事をする必要がある」のように、仕事があることによって治療が続けられるという様子より<仕事があることによる治療の支え>が抽出された。

## 考察

今回の結果では、いずれの調査対象も当然のこととして挙児希望があり、結婚直後や避妊を中止して1年後の早い時期から不妊治療を開始していた。そして、きょうだい子どもなど身近な子どもとのかかわりによって挙児希望は強化されていた。また、ART でしか妊娠が望めない厳しい男性不妊に対して<子をもつ事を夫婦の目的>として、治療のサイクル毎に夫婦ともに侵襲的な治療を受けていた。しかし、ART の妊娠率は2割程度で決して高くない<sup>3)</sup>と言われるように、治療の成績は決して良くは無いため、治療を重ねるほどに<治療に対する期待と落胆>を繰り返していた。石村らは、子どもをもつことに夢や希望が膨らめば膨らむほど「命をつなげない」と感じたときの落胆は計り知れないと述べている<sup>4)</sup>。また、赤城は、不妊を自覚すると、子ども願望が強化され、実現の可能性が低いほど、その人にとって目標の魅力や価値が大きくなると述べている<sup>5)</sup>。ことより、不妊治療の結果そのものが厳しい治療を継続することに繋がっているとも考えられる。

男性不妊治療の特性として、今回の対象は2名とも結婚後早い時期に不妊の原因が分かり、女性側の検査はほとんどされずに ART が開始されていた。通常、女性に不妊の原因がある場合は、原因のスクリーニング検査と不妊治療が平行して段階的に進められるため、治療や検査の内容は多くなる<sup>6)</sup>。伊藤らは、不妊女性は治療のステップアップを勧められたときに不妊治療への迷いや葛藤が起こっていたと報告している<sup>5)</sup>が、今回の対象にはこうした段階は存在しない。一般的にも男性不妊の治療では、治療の種類が少ないことに比して ART の割合が高いことより、はじめから治療の選択肢が限られている傾向がある<sup>4)</sup>ことから、男性不妊による不妊治療を受けている女性は同様の経過を採るものと思われる。治療開始当初から、子どもをもつ希望を持って<夫婦が協力しているという実感>や<夫婦で感情を共有しているという実感>のもとに、<夫に対する気遣い>を夫の心身に向けながら ART に取り組む様子は、男性不妊による不妊治療を受ける女性心理の特徴といえる。

しかし、治療の選択肢が乏しい上に治療の成績も悪い状況から<治療に対する期待と落胆>を繰り返してゆくうちに、不妊の原因が夫にあることで<夫に対する怒りの感情>が生じ、<夫への気遣い>との間で葛藤する様子がうかがわれた。また、「夫のせいだと思っている自分は悪いと思う」という語りからは、夫に対する怒りの感情を

抱いている自分に対しても負の感情を抱いていることが明らかになった。男性不妊による不妊治療を継続している女性が、こうした自分自身に対する負の感情を内に秘めている可能性を踏まえて、支持的にかかわることが求められるのではないかと考える。治療が長期化してくると「(何度も失敗して)自分は子どもに対する情熱はちょっと…」という語りからは、治療に対する落胆を繰り返すうちに治療に対する意欲は低下してゆき、「夫と二人の生活もいいかなと思う」ように、夫婦の生活に子どもをもつこと以外に別の価値を見出そうとするようになることがうかがわれた。これは、石村らの時を経て不妊である自分を認める方向に進むことで不妊の苦悩を乗り越えることができる<sup>3)</sup>と述べている。しかし、「(夫は)可能性のあるなら『もう1回切る』って言う」「主人はとにかく子ども欲しいから、それで私にも『やれ』って…」などの語りからは、可能性にかけて治療を継続しようとする男性と、治療継続に迷いを生じている女性との間で、治療に対する思いにずれを生じている様子が明らかになった。長期にわたって男性不妊による不妊治療を受けている女性には治療継続における迷いがあるかもしれないことを考え、夫婦間で治療の希望に関する話し合いができるよう支援することも必要ではないだろうか。

白井は、子をもつ意味を「家族の結びつき」「命を伝える」「家の存続」といった『家族』の連続性としてとらえている割合が、同年代の有子女性よりも不妊女性のほうが優位に高かったと報告している<sup>4)</sup>。本調査でも、「自分が家の跡取り」「家や墓を守らないといけないから跡取りが必要」などの語りから、夫婦には家をつなぐ役割があるという認識のもとに不妊治療を継続していることが分かった。しかし、「AIDは育児とか将来のこと考えると難しい」「二人の間に出来んのやったら養子はもらわないと思う」などの語りからは、治療の選択肢が少ない中でもAIDや養子縁組は望まず、血のつながりを重視していることが分かる。男性不妊の治療を継続している女性にとっては、子どもをもつということだけではなく夫の血をつなぐということが重要であり、それゆえに治療がうまくゆかない場合には治療を続ける上での悩みも深いことが予測される。

吉沢らは、不妊女性の悲しみと苦悩に身近な人間関係のなかで受けるストレスを指摘している<sup>5)</sup>。今回の調査では、実父母、義父母、職場の人間などとの関係とその影響が語られていた。実母は、「うちの母は毎回すごく期待して、だめだったっていうとすごくがっかりしてる」「母は不妊治療で障害児が生まれるのではないかと心配している」と語られるように、治療周期の度に子どもができることを期待し、治療を受ける娘の体や、妊娠した場合の胎児への治療の影響を案じていた。また、「(子どもができないなら)実家でも帰って来いって言った」という語りからは、女性が「自分には不妊の原因が無い」と思っている以上に両親は不妊治療を続ける娘に理不尽さを感じていると思われ、治療を継続する上での支えにはなりえない存在であることが分かる。

一方、義父母は「早い頃は『子どもまだか?』って言うっていましたが、主人の乏精子症のこと話してあるので最近は何も言わない」「主人の両親がうちら二人に『子ども育てて何ぼやから、養子もらってでも育てろ』って言う」などその言動は様々であるが、男性不妊により治療を続ける女性が夫の血をつなぐことを重視していることと、義父母が養子縁組をも勧めることとは大きく食い違っており、義父母もまた不妊治療を続ける夫婦にとっては支えとはなりえないことが分かる。

今回の調査対象はいずれもフルタイムの仕事があり、ARTによる治療継続のために

は休暇が必要となるため、上司や同僚にも不妊の治療を行っていることを明らかにしていた。職場の人間からは「他に子どもが出来にくい人がいたら私のほうが大変だからって言って、励みにされたりしている」「流産した人なんか落ち込んでると、あの人（自分）はもっと厳しいんだからって・・・複雑ですね」と、励まされたり、同情されることで、より傷ついていることが分かる。しかし、同僚の理解と協力が無くては ART による治療が続けられないことより、その後の人間関係を維持するために、同僚を「（不妊のことを）話せる相手が増えたと思うようにしている」ように、同僚との関係を肯定的にとらえようとしていることが分かった。

平山らは、不妊治療中の女性にとって友人と話すことは治療に失敗した時の心の癒しになり治療継続への意欲になること、セルフヘルプグループのニーズがあることを報告している<sup>10)</sup>が、今回の調査ではいずれの対象も不妊の友人との関係は語られなかった。「私は自分に問題が無いから、・・・他の人に比べたら気持ちの問題とか全然違うし、楽だと思う」という語りからは、自分は正常である、他の人よりはマシであるといった思いがあるゆえに、不妊の友人ができにくいことや、たとえ友人ができても孤立する可能性があることを示唆している。男性不妊による不妊治療を受けている女性は、不妊治療の継続そのものに迷いがあるにもかかわらず、周囲の人間からの支えが希薄な状態のなかで治療を継続していることが明らかになった。このことより、男性不妊による不妊治療を継続している女性が心理的に孤立していないかに注意を払い、心理的サポートの調整を心がける必要があると考える。

一方、仕事と不妊治療の継続においては、治療方法が ART に限られ、私費診療の治療を継続するために仕事を続ける必要があるが、治療の周期には連日のホルモン注射や、IVF-ET のために休暇が必要となることから、治療継続と仕事との両立の困難さを抱きながら治療を継続していることが明らかになった。しかし、職場での人間関係を肯定的にとらえることでストレスを乗り越えようしたり、仕事があることが経済的にも心理的にも支えとなり不妊治療が続けられるというとらえ方によって、仕事との両立の困難さを前向きにとらえようとするなどの対処行動があることが明らかになった。こうした不妊治療を続ける女性の強みを生かしつつ、診療の場面では仕事と治療の両立における負担が軽減できるよう、フレキシブルな診療体制の確立や診察待ち時間の短縮など、診察環境の整備に取り組むことも必要とされる。

## 本研究の限界と課題

本研究は、2 名という限られた対象によるものであり、その結果の解釈や仕様には慎重さを必要とする。研究の結果を一般化することを目的としてはいないが、今後は対象者を増やして傾向を比較検討することも必要であると考ええる。

## まとめ

本研究の結果から、男性不妊により不妊治療を継続している女性は、子どもをもつことを夫婦の共通の目的として、自らの意志で ART を主とする治療を開始していた。そして、治療を継続するうえでの心理的支援が希薄な状態のなかで、夫への気遣いと夫への怒りの感情との間で葛藤しながら、治療を継続していた。更に、治療のサイク

ル毎に期待と失望を繰り返すなかで、不妊治療の継続について迷いが生じていた。不妊治療を継続するか中止するかは、夫婦の合意の上で決定しなくてはならない。ARTによる不妊治療を継続すること自体が強い挙児の希望がなくては難しいことを配慮して、男女間の挙児への希望が、治療の経過を通して一致したものであり続けられるような関わりが必要であると考える。そして、治療を続ける女性が、心身ともに快適に治療を継続してゆけるような援助と、診療上の工夫が求められている。

## 文献

- 1) 北村邦夫他. 不妊ホットラインの実践を通して. 母子保健情報, 母子愛育会, 1999; 39: 31-34.
- 2) 千葉ヒロ子. 不妊症女性の治療継続にともなう精神心理的研究. 母性衛生, 1996; 37(4): 497-508.
- 3) 繁田実. 体外受精, 顕微受精の最近の動向. 産婦人科治療 2000; 80(6): 1153.
- 4) 石村美由紀, 浅野美智留, 佐藤香代. 不妊女性における苦悩とその克服—女性の語りから考察する—. 母性衛生, 2009; 49(4): 592-601.
- 5) 赤城恵子. カップルは不妊カウンセリングに何を求めているか—心理カウンセリングの経験から. 第13回不妊カウンセラー・体外受精コーディネーター要請講座講演集. 日本不妊カウンセリング学会, 2003.
- 6) 中嶋文子, 阿部正子, 宮田久枝. 不妊原因別にみた不妊治療中の女性の医療に対する要望の分析. 滋賀母性衛生学会誌, 2006; 6 (1): 38-43.
- 7) 伊藤妙子他. 不妊相談 1500 例のデータにみる生の声. 助産婦雑誌. 1999; 53(3): 34-38.
- 8) 白井端子. 不妊治療中女性の夫婦・子および「家」的考えに関する分析. 香川医科大学看護学雑誌. 2000; 4(1): 51-60.
- 9) 吉沢豊予子, 鈴木幸子編著. 女性の看護学—母性の健康から女性の健康へ. メヂカルフレンド社. 2003; 281-301.
- 10) 平山史朗, 吉岡千代美, 山口見寿恵, 向田哲規, 高橋克彦. ART に対する患者の心理調. 日本受精着床学会雑誌. 1998; 15: 145-149.



表 1 男性不妊により不妊治療中の女性の社会心理状況

カテゴリ【7】	サブカテゴリ【34】	コード "123"	コメントの一部
【子どもを持つことへの希望】	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 &lt;育児の計画がある&gt;</li> <li>2 &lt;子どもとの接し方によって育児希望が生まれる&gt;</li> <li>3 &lt;子どもを持つことが夫婦の目的&gt;</li> <li>4 &lt;育児への絶望&gt;</li> <li>5 &lt;子どもがいない生活も考える&gt;</li> </ul>	9	<p>"結婚してすぐ治療を開始""子どもは3人欲しいとおもっていた""産妊をやめても妊娠しないから婦人科を受診した""兄弟の子どもを見るのがかわいし、欲しいと思う""二人の生活でもいかに七思五算が横行くほど難しくなると思ったから、少しでも早く治療を始めようと思った""25、27、29で一人ずつ産んで30までには終わらなくて済めばいい"</p>
【不妊治療への思い】	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 &lt;身体的負担・経済的・時間的&gt;</li> <li>2 &lt;治療に対する期待と落胆&gt;</li> <li>3 &lt;治療継続への意欲&gt;</li> <li>4 &lt;自分では悪くないと思う&gt;</li> <li>5 &lt;不妊の悩み&gt;</li> </ul>	37	<p>"注射の副作用とか痛さばしんどい""期待していたのに失敗するで落ち込む""3回目は結果にあまり期待しなかった""自身症状でだんだん分かるようになる""治療そのものの気持ちの辛さには無い""自分には問題が無い""自分でもできたからラッキーと思う""自分分は子どもに対する情報が失せている""3回目にはもうイヤになっていった"</p>
【男性不妊治療の特徴】	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 &lt;不妊治療の開始のきっかけ&gt;</li> <li>2 &lt;不妊治療の経過&gt;</li> <li>3 &lt;不妊治療は夫婦です&gt;</li> <li>4 &lt;女性の検査はほとんど無い&gt;</li> <li>5 &lt;治療の成績は悪い&gt;</li> <li>6 &lt;治療の選択肢が乏しい&gt;</li> <li>7 &lt;新しい治療に対する期待&gt;</li> <li>8 &lt;精子の採取に困難的な治療を要する&gt;</li> <li>9 &lt;希望を押し困難な治療に挑む&gt;</li> <li>10 &lt;診療科間の連携を要する&gt;</li> </ul>	25	<p>"検査医師の夫が自分で精液検査をしただけ精子症だった""不妊治療は夫婦一緒にするものと思った""IVFが必要""外科手術でも回復困難な情報があった""半年から1年に1回のペースで顕微授精をやった""民間病院で顕微授精2回した""大学病院でも顕微授精をしている""泌尿器科で採った量と産婦人科で保管している精子の量が違う""自分はホルモン検査だけだった""精液から精子を取る検査をしたから、精子の細胞が全然無かった""治療開始当時の医者ではどうすることもできないほどの男性不妊だった""ADしかないといわれた""30才で再診したら治療方法があるといわれた""精子の採取に困難的な治療を要する""ART治療の成績は悪い""夫は希望があるから治療するという"</p>
【治療を続ける上での夫との関係】	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 &lt;夫婦の共通の目標があるという実感&gt;</li> <li>2 &lt;夫婦が協力しているという実感&gt;</li> <li>3 &lt;二人で感情を共有しているという実感&gt;</li> <li>4 &lt;夫に対する気遣い&gt;</li> <li>5 &lt;夫からの期待&gt;</li> <li>6 &lt;夫に対する怒りの感情&gt;</li> </ul>	19	<p>"夫婦間に子どもと言う共通の目標がある""治療には二人とも積極的で協力的""何度も採精のための手術はできない""夫とタイミングを合わせて休養を取って治療する""治療に使うお金の多い方を夫と相談して決めている""夫には何でもいえる""おいおい二人でいっ""男としてダメだと思ってい""夫は口には出さないが落ち込みだと思ってい""夫が再診を希望した""夫は採精後は歩けないくらい疲れている"</p>
【血をつなぐという役割り認識】	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 &lt;血をつなぐという役割り認識&gt;</li> <li>2 &lt;他人の子はいらない&gt;</li> </ul>	4	<p>"家や墓を守らなさいといふが""夫が胎児が必要""夫の子供がでなければ養子には要らない""ARTは育児と将来のことと考えて難しい"</p>
【周囲の人間との関係】	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 &lt;実父母との関係&gt;</li> <li>2 &lt;義父母との関係&gt;</li> <li>3 &lt;職場の人間との関係&gt;</li> <li>4 &lt;他人との関係&gt;</li> </ul>	19	<p>"母は不妊治療で障害児が生まれるのではないかと心配している""実母は毎回期待する""義父母は何も言わな""義父母は養子でも育ててと言""不妊の人や流産した人の励みにされるので複雑""知っている人が増えたことを、話をできる人が増えたと思うようにしている"</p>
【仕事と不妊治療との関係】	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 &lt;治療継続と仕事との両立の困難&gt;</li> <li>2 &lt;仕事があることによる治療の支え&gt;</li> </ul>	10	<p>"休職のために職場に説明した""仕事で安眠できない""仕事中は気を紛らわせる""ARTにはお金がいるから仕事はやめられない"</p>